

論文の要旨

論文題目	複文表現の意味的カテゴリー —「目的」「付帯状況」をめぐって—
氏名	梶川 克哉
学位	博士（文学）
授与年月日	平成24年9月27日

本論文は、現代日本語の複文表現の中でも、特に従来「目的」「付帯状況」を表すとされるいくつかの表現について、その用例に基づいて比較と分析を行い、それぞれの一般的な意味を導出した。分析対象とした表現形式は、「目的」の「～ために」及び「～に＋移動動詞」、「付帯状況」の「～ながら」及び「～つつ」、そして、そのどちらにも解釈され得る「～がてら」である。

類似機能を持つこれらの表現形式に対して、従来の研究が行ってきた、「目的」「付帯状況」という、いわばラベルで括る文法的機能の整理は、複数の表現形式間に何らかの共通性を見出すという点で、大きな貢献を果たしたといえる。しかし、実際の用例を観察していくと、類義表現では言い換えられず、表現形式一つ一つに独自の意味が認めなければ解釈できないものがある。さらに、「～がてら」をめぐっては、先行研究でも、「目的」とするものもあれば、「付帯状況」とするものもある。実際、本論中の類義表現との比較から得られた「～がてら」の意味には、両者の抽象的意味特徴が関わっていることが認められた。

各形式によって表される事態を分析して検討した結果、本論文は最終的に以下の点を主張するに至った（第6章）。

- ①「目的」「付帯状況」という抽象的意味が存在し、各類義表現の個別的意味はそれを最大公約数的に共有している。
- ②「目的」「付帯状況」表現の中でも、それぞれ典型的な表現形式から、周辺的な表現形式まで、典型性に程度差がある。
- ③「目的」「付帯状況」の間に明確な境界線は存在しない。

以上の主張は、各章での議論を経て得られたものである。

まず第3章において、「目的」カテゴリーをめぐって議論した。はじめに「～ために」の後件を移動動詞に限定して、移動の目的を表すとされる「～に＋移動動詞」との比較を行い、それぞれの意味的相違を記述した。次に、「～ために」には「目的」を表す用法のほかに、「原因」を表す場合もあることに着目し、その共通の意味特徴を探った。そこから得られた、「目的」を表す「～ために」の意味と、先に検討した「～に＋移動動詞」の意味を改めて比較し、その共通部分を抽出した。その結果、「目的」カテゴリーを特徴付ける抽象的

意味と、その成員である「～ために」、「～に+移動動詞」の個別的意味を以下のように示した。

目的：＜主体が実現し得ると考える行為や状態＞

「～ために」句+後件：＜主体が実現し得る、ある対象の行為や状態を想定し、その実現に必要な要素だと考えられる行為を行うこと＞

「～に」句+移動動詞：＜ある行為の実現が可能な場所への移動を行うこと＞

続く第4章では「付帯状況」を表す「～ながら」と「～つつ」を比較した。ここでは、まず前件で表される内容を4つのプロセス（動態、状態、経過的、瞬間的）に分類し、それぞれで表される内容が「付帯状況」の内実であるとした。その上で「～ながら」、「～つつ」を比較し、以下のように個別的意味を示した。

付帯状況：＜動作主体の身体的・心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、身体の動き、瞬間的に生起する体勢あるいは心理状態＞

「～ながら」句+後件：＜ある主体の、後件の事態に影響を及ぼし得る身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態、社会的状態、体勢・心理状態維持の中で、後件の事態が成り立っている＞

「～つつ」句+後件：＜人の、身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、体勢・心理状態が途絶えることなく維持されている中で、それを妨げない後件の事態が成り立っている＞

なお、最後に「～つつ」は書き言葉として多用されるという用法上の特徴についても触れている。上記のとおり、この表現の意味の中には強い意志性が反映されており、用法上の特徴は、この点に由来しているのではないかという提案を行っている。

以上の二つの章での議論で明らかになった類義表現間の共通の意味特徴が①を主張する基盤となっている。

第5章では「～がてら」とその類義表現（「～をかねて」、「～かたがた」、「～ついでに」）を比較した。ここでの分析で得られた「～がてら」の意味は次の通りである。

「～がてら」句+後件：＜後件行為をする過程で、前件で表される話者が望ましいと考える状態が実現されることを期待して、あるいはその実現のための行為ができると期待して、後件行為をする＞

この意味内容には先述の「目的」と「付帯状況」の抽象的意味との部分的関連性が認められる。すなわち、＜話者が実現されると期待する、望ましい状態＞は「目的」の意味と、そして、後件の過程性に注目し、それにまつわる何らかの状態を述べるという点は「付帯状況」と、それぞれ関連性を持つ。この点を以って、「～がてら」は両カテゴリーの成員であると認めることができる。また、「～がてら」は「目的」、「付帯状況」という二つのカテゴリーの成員であるものの、それは周辺的な成員として位置づけられる。このことから、

成員間には典型性の程度差が存在するという②も立証される。

さらに、「～がてら」の意味は「目的」カテゴリーの要素と「付帯状況」カテゴリーの要素を折衷的に取り込んでいるということから、両カテゴリーに跨った中間的な表現として位置づけられる。このことから、両カテゴリー間には明確な境界線は存在しないという③の結論に至っている。

議論の根底に一貫してあるのは、認知言語学のカテゴリー観である。本論文の結論は、認知言語学のカテゴリー観の重要な理論、プロトタイプ理論とスキーマを援用することで得られた知見である。この理論的背景については、分析に先立ち、第2章で概観している。

本論文で取り上げた言語表現はいずれも機能語と呼ばれる、複文を形成する言語形式であった。動詞や名詞など、自己充足的に豊かな意味構造を持ついわゆる内容語とは異なり、機能語はもっぱら文法的役割を果たすものと考えられてきた。しかし、本論文の分析によって、機能語の意味も内容語同様、(抽象度は高いものの) さまざまな意味のカテゴリーが複合的にネットワークを形成し、その上に成り立っていることが示された(第6章の図1)。このことから、内容語と機能語というものは、連続的で、明確に区別できるものではなく、両者とも同じように複合的カテゴリーから成るという結論に至った。

本論文は、便宜的に「目的」「付帯状況」というカテゴリーに限って、そこに含まれる言語表現のいくつかを分析してきた。しかし、本来、意味のカテゴリーは明確な境界線を持たず連続的であることから、あるカテゴリーを限定的に取り出すことはできない。ゆえに、より網羅的な意味の記述のために、さらに他の意味カテゴリーとの関連も検討すべき課題として残る。また、言語の意味探究の別の方向性として、「～ために」が「目的」と「原因」を表しているように、同一形式で複数のカテゴリーを表すことができる現象が他言語でも観察されることにも触れた。このことから、人間の事態認知のあり方には、汎言語的に認められるものも存在するだろうという見通しを述べている。

以上のように、認知言語学的なカテゴリー観に立てば、抽象度のレベルを問わず、より多くの言語形式あるいは意味カテゴリーとの関わりを、言語使用の実態に沿った形で描き出すことが可能となる。